

〔総説〕

看護学研究におけるサルトル哲学の可能性

宮子（藤江）あずさ*

POSSIBILITY OF SARTRE PHILOSOPHY IN NURSING SCIENCE RESEARCH

Azusa MIYAKO(FUJIE) *

キーワード：サルトル、実存主義、看護、ヒューマニズム

Key words : Sartre, existentialism, nursing, research

I. はじめに

高度医療とそれに伴う高齢化により、病みつつ生きる人は増加している。看護師をめぐるのは、労働条件などの社会的問題が注目されるが、この仕事の本質的な厳しさは、弱者としての患者に譲歩し、受け身でなければならない点ではないだろうか。看護の意味、看護師として生きる意味を探求するには、この厳しさをどのように引き受け、自己の現実と向き合うかが重要である。

ここで問われるのは、あるべき理想やこうあってほしいという願望ではなく、個人が主体的に生きているありのままの現実存在（実存）であろう。ひとりひとりの看護師が、自己の実存と向き合い、看護の本質を明らかにしていく実存主義的な研究が今求められている。本研究では、実存主義哲学の中でも、人間の自由と選択の問題を終生探究したサルトル哲学における、その人間観を活用した看護研究の可能性について検討する。

II. サルトル哲学の特徴

1. サルトルの実存主義

実存主義哲学者であるジャン・ポール・サルトルは実存主義の立場から、主著である『存在と無』を初めとする多くの作品を執筆し、人間存在の分析を行っている。実存主義とは、19世紀の合理主義的観念論ならびに実証主義的思潮に対する反動として起こった、主体的存在としての実存を中心とする哲学的立場、およ

びその20世紀における継承をさす（哲学事典，1971）。

サルトルはこの実存について、「人間はまず先に実存し、世界内で出会われ、世界内に不意に姿をあらわし、そのあとで定義される……実存主義の考える人間が定義不可能であるのは、人間は最初は何ものでもないからである」（Sartre, 1946 / 伊吹, 1996, p42）と述べている。一方、本質についてサルトルは、「本質とは、人間存在について、『それは……である』ということばで示しうる全てのものである。この事実からして、本質とは、行為を説明する諸性格の全体である」（Sartre, 1943 a / 松浪, 2007, p145）と述べている。そして、「実存が本質に先だつ」という実存主義のテーゼを根拠づけるのが、「人間存在は無であり、それゆえ自由である」という『存在と無』で展開される存在論である。

『存在と無』においてサルトルは、「それがそれであるところのものであり、それであらぬところのものではない」即自存在と、「それがあるところのものではなく、あらぬところのものである」対自存在という、2つの存在形式があるとする（Sartre, 1943 a / 松浪, 2007）。これは非常に難解な表現であるが、多くのサルトルの解説書において、即自存在を事物、対自存在を意識と説明している（海老坂, 2005; 村上, 2000; 澤田, 2002 他）。対自存在としての意識は指向性を持ち、必ず何ものかについての意識である。サルトルは、「意識は、それにとってはその存在のうちにその存在の無の意識があるような一つの存在である」（Sartre, 1943 a / 松浪, 2007, p170）とする。意識はそれ自体の内容を持たない「無」であり、対象との関係性なのである。

松浪は『存在と無』の訳者あとがきで、こうした意

*東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期課程（Tokyo Women's Medical University, Graduate School of Nursing）

識のあり方をふまえ、「私は存在するのでなく、私は実存するのである」(Sartre, 1943 a / 松浪, 2007, p630)と述べている。人間存在の根源である意識は、確固たる存在を持たず、ゆえに自由である。これがサルトルの実存主義の根本である。

2. 看護学研究に適する根拠

看護師の実存から、看護の本質を明らかにするために、サルトルの実存主義哲学が適していると考えた理由は、以下の3つである。

第1の理由は、サルトルが哲学、文学など幅広いジャンルの著述を通して人間の真理を探究した作家であったからである。生涯の伴侶であったシモーヌ・ド・ボワヴォールは「彼の心底の考えは、歴史のいかなる瞬間においても、いかなる社会的、政治的背景においても、人間を理解することが常に本質的なこと」(Beauvoir, 1974 / 二宮, 1983, p39)であると述べている。そして、この人間観の基本には、選びたい選択肢がない、あるいは自ずと結論が決まるような、選択の余地がない状況においてすら、選択せざるを得ない人間の実存への深い関心がある。

サルトルの倫理思想に詳しい水野浩二は、サルトルの倫理思想の根幹について、「人は状況を自覚し、責任と危険を引き受ける時、本来性に到達できるのである。そして、こうした本来性に向かって自己を選択することが、自由そのものなのである。自由とは、自分が作ったわけでもないもの、望んだわけではないもの(たとえば病気)について、あとで責任を取ることである」(水野, 2004, p156)と述べている。病む人を看護する葛藤の多くは、病気を引き受けられず、この本来性に到達できない患者やそれにかかわる人々の苦悩に由来する。病む人とかわる看護を考える上で、この人間観は妥当であると考えられる。

第2の理由は、サルトルの人間観にはヒューマニズムとユーモアが読み取れるからである。この時のヒューマニズムは、「人間性を尊重し、これを束縛し抑圧するものからの解放を目指す思想」(哲学事典, 1971, p1161)と定義される、文字通りの意味である。そしてそのユーモアは、このヒューマニズムゆえに、鋭い表現であっても腑に落ち、真理を突くのである。

例えば彼は、人間の死について、「毅然として処刑に対する心がまえをなし、絞首台の上で取り乱さないようにあらゆる配慮をめぐらしているひとりの死刑囚が、そうこうするうちに、スペイン風邪の流行によってぽっくり連れ去られるような例に、我々をなぞらせる方が

至当であろう」(Sartre, 1943 c / 松浪, 2008, p263)と述べている。

この報われない決意は、「存在と無」に先だつ1937年に発表された小説「壁」で描かれ、死刑を覚悟した兵士は、思わぬ偶然から仲間命と引き替えに、自らが助かる運命となる。その解説で、訳者の伊吹武彦は「この作品には『偶然』の問題が扱われている。人生を虚妄背理とみる実存主義の立場が、この短編の最後に、主人公の絶望的な哄笑となって現れている。サルトルのその後の作品、その後の思想展開は、実はこの哄笑の終わったところからはじまるのである」(Sartre, 1937 / 伊吹, 1969, p253)とする。

「笑い学」を提唱した木村洋二は、「ユーモアは、笑いの力によって意味世界へ貼り付いた自己を引きはがし、他者の視点、別の視点から自分を見ることを可能にする」(木村, 2010, p19)と述べている。また、パトリシア・ベナーは、ユーモアと笑いについて、「状況を新しい枠組で捉え直すのを容易にする」(Benner & Wrubel, 1989 / 難波, 1999, p24)とし、「熟練看護師は意思の疎通の手段としてユーモアを活用することがしばしばある」(同書, p24)と述べている。熟練看護師の臨床知を解き明かす上でも、ヒューマニズムに裏打ちされたサルトルのユーモアは、示唆に富んでいると言えよう。

看護学者のガートルード・トレスは、「看護の主要な焦点は人間・個人にある」とし、「人間についての理解が深まれば深まるほど、看護ケアの効果はあがるであろう」(Torres, 1986 / 横尾ら, 1992, p220)と述べている。言うまでもなく、看護とは、人間同士の営みであり、看護師自身の人間観が常に問われている。この人間観を深める上で、サルトルのテキストは、手がかりに満ちていると考える。

そして第3の理由は、サルトル哲学が、書くことを通じての発見、変革を展望した点である。サルトルは状況へのかかわりを重んじ、これが後述するアンガジュマンの思想となり、1960年代から1970年代にかけて、時代に求められた知識人としての活動に繋がっている。サルトル哲学は実践の哲学であり、看護職の現状を変革したいという立場に立つ看護師が、看護の意味を探求する裏付けとなり得ると考える。

以下に、看護との関連が深いと考えるサルトル哲学の人間観を表す基本概念について述べる。

Ⅲ. サルトル哲学の人間観

1. 存在論—避けられない自由と選択

1) 根源的自由をめぐる

サルトルは、「人間的自由は人間の本質に先だつものであり、本質を可能ならしめるものである。人間存在の本質は、人間の自由のうちに宙に懸けられている」(Sartre, 1943 a / 松浪, 2007, p122) とし、人間の存在は根源的に自由であるとする。この根源的自由はサルトル哲学の根本概念の一つであるが、批判も数多く出されている。

澤田はこの反論をふまえ、「常識的に考えると、これはどうも首肯できない。私たちは日々、自由でないという経験をしているのだから。だが、とサルトルは反論する。それは自由の意味を取り違えているからなのだ。自由とは、しようと思つたことができることではない。そうではなくて、しようと思つることなのだ。人間は常に状況のうちにある。これは逃れがたい事実だ。だがその状況に意味を与えるのは私たちなのだ」(澤田, 2002, p48-49) と述べている。

サルトルは、「私は不断に私自身を選ぶ」(Sartre, 1943 c / 松浪, 2008, p135) とし、「われわれは、自由へと呪われている」(同書, p146) と述べる。サルトルにとって自由は権利として主張され、獲得されるものではなく、人として生まれたかぎり、引き受けなければならないものである。そして、その選択は過去の行動の責任を問うための概念ではなく、未来に責任を負うための概念である。従って、決して現状変革を阻害する宿命論ではないと考える。

選択の余地なく病を抱える人とかかわる中で、厳しい現状であっても、未来に繋がりながら、今を生きていくことを可能にする思考と、選択せずに生きられない人間へのまなざしは、看護に生かせる人間観ではないだろうか。

2) 自己欺瞞とくそまじめの精神

サルトル哲学の基本となる自由は、いわば人間にとっての宿命とも言える。これは常に重い責任を担い続けることであり、寄る辺ない不安の根拠となりうる。この負担に耐えかねた人間が、自由や選択の責任から逃れるためにとる態度が、「自己欺瞞 (mauvaise foi)」と「くそまじめの精神 (esprit de sérieux)」である。

まず、自己欺瞞とは、「意識がその否定を外に向けるのではなく、自己自身に向けるような一定の態度」(Sartre, 1943 a / 松浪, 2007, p172) であり、「自己

に対する虚偽である」(同書, p172)。『存在と無』では女性が男性に手を握られ、さらなる発展に期待しながらも、貞淑さを示すという矛盾した態度をとるため、手を握られている事実をないもののように振る舞う姿が、例として描かれている(同書, p189)。これを看護師としての経験に置き換えると、患者の不安を感じながら、自分の無力を感じたくないがために、その不安をなかつたこととしてしまう。そのような例に思い至る。

次にくそまじめの精神について、訳者の松浪信三郎は用語解説の中で、「そのつど自ら選ぶ自由な精神とはまったく反対。『立て札があるから芝生にはいらぬ』『命じられたから実行する』、というような融通のきかない精神。……私の自由が世界に与えた意味を、世界の方から来たものとして受け取り、それによって私の義務を構成する精神」(Sartre, 1943 c / 松浪, 2008, p532) と説明している。訳語としては妥当か否かを検討する余地はあるが、現在までこれに関する訳語としては、他の表現は使われていない。松浪はこの語をあてた意図を、「この語は謹厳な精神、きまじめな精神などと訳してもいいが、もちろん、反語的な皮肉な意味で用いられている」(Sartre, 1943 a / 松浪, 2007, p596) と訳注で解説している。サルトルの文章が持つ独特のユーモアや皮肉をふまえての訳語と言えよう。

筆者は24年間看護師として働く中で、看護師集団に対して感じていた違和感のかなりの部分は、このくそまじめの精神と自己欺瞞の概念で説明できると考えた。自己欺瞞にせよ、くそまじめの精神にせよ、これは看護師個人が、自らの自由において他者の自己決定にかかわり、人の生命に責任を負う重責から逃れるために、やむなく引き受けるものであろう。さらにくそまじめの精神は、看護師に対する社会的なイメージと重なる部分もある。くそまじめの精神の存在を自覚的に引き受け、自己欺瞞に陥らないありようを可能にする方向を、探究してみたいと考えている。

3) 状況を引き受けるアンガジュマン

それでは、自己欺瞞、くそまじめの精神といった仮面をかぶらざるを得ないほど困難な状況にあって、看護師が積極的に引き受けるように見えるのはなぜであろうか。これを説明する概念として、サルトルの「アンガジュマン (engagement)」について述べる。

アンガジュマンとは、フランス語で「巻き込む、拘束する」を意味する「engager」から派生した言葉で、「社会参加」「政治参加」などの訳語が知られている。

サルトルは1950年代になるとマルクス主義への傾倒を深め、「政治的スタンスは著作にも反映し、『方法の問題』(1957年)の中で、マルクス主義こそが現代唯一の哲学…(略)…と言う立場にまで変貌する」(澤田, 2008, p253)。アンガジュマンの名の下にソビエト、キューバなど共産主義国家を擁護する発言を行ったが、これがすべてではない。

「存在と無」の訳者である松浪は「自己拘束」と訳す(Sartre, 1943 b / 松浪, 2007)。アンガジュマンの説明としては、澤田による「好むと好まざるとにかかわらず、我々が状況のなかに捉えられてしまっている(engag:)のが私たち人間の根本的なあり方だ。このような事実と同時に、自分の自由を自覚し、投企によって状況の内に自らを投げかけること(s'engager)。それがアンガジュマンという思想の骨子」(澤田, 2002, p119)を採用する。なお、投企とは「それぞれの実存が自ら選んだ価値へと自らを投げ出すこと」(同書, p119)をさす。

看護師は自らの自由に基づいて看護という仕事を選ぶが、その後職業を通して出会う患者との関係は、決して選択的ではない。看護師にとってどの患者と出会うかは、まさに「好むと好まざるとにかかわらず、我々が状況のなかに捉えられてしまっている」のである。しかし、そこから逃げ出すのではなく、かわろうとするのはまさに投企である。こうしたありようを意識し、自らがその関係を引き受けることが、仕事の意味づけの上で欠かせない「覚悟」なのではないだろうか。

看護師も、患者も、状況のなかで出会う以上、その状況のあり方と無縁ではない。サルトルが初めて「文学に固有のアンガジュマンを深く追求した」(海老坂, 2005, p162)ように、看護がそのヒューマニズムの名において、社会に何を投げかけるのかを、実践の中から探究する必要がある。

2. 他者論—他者を通して自己があらわれる

1) 対他存在とまなざし

サルトルにとって他者の存在は大きく、他者について「他者の出現そのものによって、私は、或る対象について判断をくださると同様に、私自身について判断をくださることができるようにさせられる。なぜなら、私が他者に対してあらわれるのは、対象としてであるからである」(Sartre, 1943 b / 松浪, 2007, p19)と述べている。自己は他者との関係により姿をあらわすものであり、看護師は患者を通してしばし

ば自己と向き合うことになる。しかしこの他者との関係は、学びになる面ばかりではなく、根深い問題を含んでいる。

サルトル演劇の名作として知られている『出口なし』には、「地獄とは、他人のことだ」という有名な台詞が出てくる。罪を犯した3人の他人同士が、ホテルのような密室に閉じ込められ、やがては犯した罪が明らかになっていく、というのが大まかなあらすじである。この作品は、『存在と無』の第三部「対他存在」の他者論との深い関係がある(澤田, 2002; 山縣, 2008)。

対他存在とは、「人間が『他者に対して存在する』という側面」(永野, 2005, p284)をさす。哲学者の竹内芳郎は、「私の対他存在は、それが他者の意識の対象であるかぎり、私自身によってはどうしても基礎づけられない、原理的に私からのがれた非条理性をもっている。……それはもはや対自ではなく即自となった私である」(竹内, 1972, p140)と述べている。サルトルはこの対他存在が生じさせる感情として羞恥をあげ、「羞恥は他者の前における、自己についての、羞恥である」(Sartre, 1943 b / 松浪, 2007, p20)と説明した。

そして、この対他存在を作り出すのが、他者のまなざしである。他者の視線を意識することから、羞恥が生まれる。サルトルは、「私が他者のまなざしをとらえるときに私を揺さぶる突然の衝撃のうちに存在するのは、突如として、私が、私のすべての可能性の一つの微妙な多有化を生きるということであり、私のすべての可能性が、私から遠く離れて、世界のただなかに、世界の諸対象と共に組み合わされるといふことである」(Sartre, 1943 b / 松浪, 2007, p122)と述べた。

たとえば患者と向き合った時、患者が看護師である私を見つめて「ただひたすらにやさしくあってほしい」と願えば、「ただひたすらにやさしい看護師」が、私の対他存在となる。たとえ私自身が、専門的な知識や技術に重きを置いていたとしても、私は「ただひたすらにやさしい看護師」である存在を拒絶できない。そればかりか、「ただひたすらにやさしい看護師」と現実の自分の姿のずれに、羞恥すら引き受けてしまうのである。

患者への気づかいを常に求められる看護師は、即自、対自という存在論を意識するまでもなく、対他存在を、看護師のありようとして受け入れてきたと考える。しかしその一方で、対自としての自己とい

う実存的なあり方が意識化できず、看護師として生きる自己の意味づけが困難になっているのではないだろうか。

「対他存在」を軸としたサルトルの他者論には批判も多い。メルロ＝ポンティは「意識とものを峻別するサルトルの二元論的思考では、歴史、シンボル体系、作られるべき真理作られるべき真理といった中間世界への視線が獲得できず、実在を取り逃がすと批判」（澤田，2008，p253）しており、それゆえ「サルトルにとっては、自己と他者の矛盾は解消しがたい」（Spiegelberg，1982／立松ら，2000，p193）とする。

しかし、こうした理論的な弱点があるとしても、患者と向き合う中で時に看護師が感じる拘束感は、このまなごしのうちにある。よって対他存在とまなごしという概念は、看護師であることに対する看護師の屈折を解き明かす鍵となる。そしてそこから、看護師-患者関係を捉え直すことが可能なのではないかと考える。

2) 看護師と患者を結ぶ「高邁な心」—ジェネロジテ

誠実な看護師であれば、自分が患者に対してどのように役立っているのかを、常に考えざるを得ない。看護師と患者の関係は、特定のサービスを提供するに留まらない、複雑さがある。「ジェネロジテ (générosité)」という言葉は、この関係を非常に良く表していると考ええる。

サルトルは『文学とは何か』において、「自由を目的とする感情を高邁と呼ぶ。かくして読書とは、高邁な心の行使である」（Sartre，1948／海老坂ら，1998，p119）と述べている。この「高邁な心」がジェネロジテであり、気前の良さ、寛大、高貴、贈り物、潔いなど、さまざまな意味を持つ言葉である。サルトルの倫理を語る上で鍵となる概念といわれているが、主に『倫理学ノート』と呼ばれる未完の断片集で思索され、サルトル自身によってきちんと定義されていない。

澤田はサルトルにおけるジェネロジテについて「世界の開示の根拠としての自由……であると同時に、倫理・実践の目標としての自由をも意味する」（澤田，2002，p113）とし、「……自分を、自分の自由を、自分の時間を与える。つまり、自らを捧げ、犠牲にするのである。ここでの贈与が所有を前提としていると考えるかぎり、ひとは持っているものしか与えられないことになってしまうが、じつはおそらく所有していないものをこそ私たちは与えるのである」（同書，p113）と述べている。

これは、看護師が患者に対して絶えず行う気づかいのあり方を表現するのみならず、看護師を支える患者の気づかいにもあてはまる概念である。たとえば新人看護師の手際の悪い処置を大らかな気持ちで受け入れ、励ます患者の態度は、まさにジェネロジテと言えよう。ジェネロジテとは「互酬性とはべつの贈与による対他関係」（同書，p113）であり、権利—義務の関係からはみ出るものである。看護師と患者が互いを育てあうこのような関係は、近年急速に失われているのではないだろうか。これをいかに復権するかが、医療の現場で問われていると考える。

Ⅳ. 看護学研究におけるサルトル哲学の活用状況

サルトル哲学の看護学研究における活用状況について概観した。まず、医中誌を使用して調べたところ、国内の看護研究論文で「サルトル」のキーワードを設定するものは発見されなかった。しかし、パースイ看護理論にはサルトルからの引用があり（Parse，1998／高橋，2004，p18）、その人間観にはサルトル哲学が反映していることが読み取れる。また、伊藤和宏は「<生きられる世界>を求めて」において、サルトルの「対自」「対他」の引用がある（伊藤，1988，p20，p24）。

続いて海外の状況を見るため、CINAHL with fulltextを使用し、2005年から2009年までの文献全文について、「Sartre」の文字が使われているものを検索した。なお、検索に際しては学術誌サブセット「nursing」を設定した。この結果43本の文献が抽出されたが、文献の質や扱いの大きさによって選別したところ、28の文献が残った。これをさらに内容で分けると、研究の方法論あるいは依拠する哲学の説明にのみサルトルの名が出てくる文献が18本あり、ほぼ全てが実存主義哲学あるいは現象学に関する内容であった。そして、残る10本が、看護やそこに含まれる人間観、関係論、疾病論などの説明にサルトルの言葉が使われている文献であった。この10本における具体的な活用を以下に示す。

- 1) Mackey，2009：健康に関する存在論的な論考を行い、現象学的視点から、看護が提供するウェルネスについて明らかにしようとした。ウェルネスの説明で、「私たちが身体を感じるの、身体への抵抗を感じる時だ」（『存在と無』）を引用した。
- 2) Buchanan-Barker & Barker，2009：精神病院の開放に力を尽くしたアメリカの精神医学者トーマス・サースの思想と業績を精神科看護の視点で再評価する論

文で、精神病への偏見を、自由に耐えられない人間が、自らの選択の責任を放棄するため、それに気づかぬふりをする「自己欺瞞」(『存在と無』)とみなした。

- 3) Martinsen, Harder & Biering-Sorensen, 2008: 脊髄損傷患者を対象に食事介助を受ける体験を探求する現象学的研究。患者心理の分析に際し、「羞恥心は自己の内面ではなく、他者からもたらされる」(『存在と無』)との記述を引用した。
- 4) Lavoie, Blondeau & Koninck, 2008: 死に臨む患者の存在について考察した論文において、サルトルが「to be is to choose oneself」(『存在と無』)という言葉で示す、選択しつつ生きざるを得ない実存的苦悩に陥れた。
- 5) Cody, 2007: 苦痛(suffering)に関する現象学的な論考を行い、『存在と無』より、「力強く、謎めいた、『まなざし』が介在する、自己と他者の関係に魅了された」という、サルトルの他者論を紹介した。
- 6) Roberts, 2007: 現代社会の男性や女性のメンタルヘルスについて考察した論文の中で、「われわれは自由の刑に処せられている」(『存在と無』)—自由と責任にどのように対処するかという重荷を肩に背負わされている—という言葉を用いた。
- 7) Scanlon, 2006: ヒューマニズムと実存主義の影響を受けてきたアイルランドの精神科看護教育の視点から、ヒューマニズムと実存主義の文献をレビュー。実存主義の説明で「実存は本質に先立つ。人間はまず実存し、世界内で出会う、世界内に不意に姿をあらわす」(『実存主義とは何か』)というサルトルの定義を引用した。
- 8) Burnard, 2006: うつの時に感じた対人恐怖をサルトルの「地獄とは他人のことであり」(『出口なし』)という言葉を用いて表現した。
- 9) Cameron, 2006: 看護に際する看護師の緊張について、サルトルが写真について述べた「今後起こり得る文脈や関係性、変化を垣間見せる」(『想像力の問題』)という一文を引用した。
- 10) Hentz & Lauterbach, 2005: ケアにおけるリフレクションに関する論文を、「作家は、世界を、殊に人間を、読者に暴露[開示]することを選んだのであり、その裸にされた対象を前にして、読者は全責任を取らざるを得ない」(『文学とは何か』)というサルトルの言葉で締めくくった。

このように、国内、海外ともに、サルトルの言葉が引かれた文献はあるものの、サルトルの人間観に深く踏み込み、それを看護に援用する研究は今のところ見

あたらない。看護学研究におけるサルトル哲学の活用は非常に限定的であり、さらに探究する余地が大きい事実が示唆された。

V. おわりに

サルトル哲学の人間観を概観するとともに、看護学研究におけるサルトル哲学活用の現状について検討してきた。偶然性に翻弄される人間存在の不条理に関してサルトルが残した言葉は、ヒューマニズムに裏打ちされ、しばしばユーモアを伴う。だからこそ、人間の闇を掘り下げつつ、その闇に光を見いだすような楽天性があるのである。この人間観は、看護する中で看護師が身につける人間観に、非常に近いのではないかと考える。

決して自らが望んで引き寄せるものではない、病を仲立ちとした患者との出会いを繰り返す看護師にとって、サルトルの人間観は、患者を、そしてそこで働くことを選んだ自己を探究する手がかりになると考える。

以上の理由より、サルトル哲学の存在論と人間観に基づき、自己の言葉を通して看護の意味づけを行う、看護学研究の可能性が示唆された。具体的な研究手法としては、著述の中で思索を深め、発見を可能とする質的研究であれば、方法は問わない。澤田は「新たな目で、過去の解釈に囚われずに読むこと。これこそ、サルトルにふさわしい読み方ではなからうか。……サルトルは、哲学においても文学においても、他の思想家・作家の概念や様式を積極的に転用＝流用＝横領(détourner)することによって、従来とは異なる領域を切り開いていった。そこにこそ、サルトル独自のスタイルがある」(澤田, 2002, p21)と述べ、自由な読み方を勧めている。サルトルのテキストを十分読み込み、研究者自身がその思想に浸り、独自の見解を持つことが望まれる。

本稿をまとめるにあたりご指導いただきました東京女子医科大学看護学部佐藤紀子教授に心より感謝いたします。

文献

- Beauvoir, S.d. (1974) / 二宮フサ訳 (1983): 別れの儀式、別れの儀式 (pp.7-157), 人文書院, 京都.
- Benner, P. & Wrubel, J. (1989) / 難波卓志訳 (1999): 現象学的人間論と看護 医学書院, 東京.
- Buchanan-Barker, P. & Barker, P. (2009): The

- convenient myth of Thomas Szasz, *Journal of Psychiatric & Mental Health Nursing* 16 (1) ,87-95.
- Burnard P. (2006) : Sisyphus happy: the experience of depression, *Journal of Psychiatric & Mental Health Nursing*, 13 (2) ,242-246.
- Cameron, B.L. (2006) : Towards understanding the unrepresentable in nursing: some nursing philosophical considerations, *Nursing Philosophy*, 7 (1) ,23-35.
- Cody, W. K. (2007) : Bearing witness to suffering: participating in cotranscendence, *International Journal for Human Caring*, 11 (2) ,17-21.
- 海老坂武 (2005) : サルトル : 「人間」の思想の可能性, 岩波書店 (岩波新書新赤版 948), 東京.
- 林達夫他 (編) (1971) : 哲学事典, 平凡社, 東京.
- Hentz, P.B. & Lauterbach, S.S. (2005) : Becoming self-reflective: caring for self & others, *International Journal for Human Caring*, 9 (1) ,24-28.
- 伊藤和弘 (1988) : <生きられる世界>を求めて: 基礎論的考察, 聖路加看護大学紀要, 14, 18-26.
- 木村洋二 (2010) : 笑いの統一理論, 木村洋二 (Ed.), 笑いを科学する: ユーモア・サイエンスへの招待 (pp.1-22), 新曜社, 東京.
- Lavoie, M., Blondeau, D. & Koninck, T.D. (2008) : The dying person: an existential being until the end of life, *Nursing Philosophy*, 9 (2) ,89-97.
- Mackey, S. (2009) : Towards an ontological theory of wellness: a discussion of conceptual foundations and implications for nursing, *Nursing Philosophy*, 10 (2) ,103-112.
- Martinsen, B., Harder, I. & Biering-Sorensen, F. (2008) : The meaning of assisted feeding for people living with spinal cord injury: a phenomenological study, *Cancer Nursing Practice* 62 (5) ,533-540.
- 水野浩二 (2004) : サルトルの倫理思想: 本来の人間から全体的人間へ, 法政大学出版局, 東京.
- 村上嘉隆 (2000) : サルトル, 清水書院, 東京.
- 永野潤 (2005) : サルトルを読むためのキーワード 25, 別冊環 11 サルトル 1905-80【他者・言葉・全体性】 (pp.281-284), 藤原書店, 東京.
- Parse, R.R. (1998) / 高橋照子訳 (2004) : パースイ看護理論: 人間生成の現象学的探求, 医学書院, 東京.
- Roberts, M. (2007) : Modernity, mental illness and the crisis of meaning, *Journal of Psychiatric & Mental Health Nursing*, 14 (3) ,277-281.
- Sartre, J.P. (1946) / 伊吹武彦訳 (1996) : 実存主義はヒューマニズムである, 実存主義とは何か 増補新装版 (pp.35-81), 人文書院, 京都.
- Sartre, J.P. (1943 a) / 松波信三郎訳 (2007) : 存在と無: 現象学的存在論の試み (1), 筑摩書房, 東京.
- Sartre, J.P. (1943 b) / 松波信三郎訳 (2007) : 存在と無: 現象学的存在論の試み (2), 筑摩書房, 東京.
- Sartre, J.P. (1943 c) / 松波信三郎訳 (2008) : 存在と無: 現象学的存在論の試み (3), 筑摩書房, 東京.
- Sartre, J.P. (1937) / 伊吹武彦 (1969) : 訳者の言葉, サルトル全集 短編集 壁 (pp.251-256), 人文書院, 京都.
- Sartre, J.P. (1948) / 加藤周一, 海老坂武 & 白井健三郎訳 (1998) : 文学とは何か<改訳新装版>, 人文書院, 京都.
- 澤田直 (2002) : 新・サルトル講義: 未完の思想、実存から倫理へ, 平凡社 (平凡社新書), 東京.
- 澤田直 (2008) : サルトル, 鷺田清一 (編), 実存・構造・他者 20世紀3 (pp.201-273), 中央公論新社, 東京.
- Scanlon, A. (2006) : Humanistic principles in relation to psychiatric nurse education: a review of the literature, *Journal of Psychiatric & Mental Health Nursing*, 13 (6) ,758-764.
- Spiegelberg, H. (1982) / 立松弘孝訳 (2000) : 現象学運動 (下), 世界書院, 東京.
- 竹内芳郎 (1972) : サルトル哲学序説, 筑摩書房 (筑摩叢書 193), 東京.
- Torres, G. (1986) / 横尾京子, 田村やよひ & 高田早苗訳 (1992) : 看護理論と看護過程, 医学書院, 東京.
- 山縣熙 (2008) : 劇作家サルトル, 作品社, 東京.